



目次

キャラクター紹介 3 ページ

ブラコン少女をおとしたい！ 4 ～ 9 ページ

悪魔に恋しちゃダメですか？ 10 ～ 17 ページ

堕天使ちゃんの休息講座 18 ～ 24 ページ

インドア姉弟の日本旅行 25 ～ 28 ページ

予告 29 ～ 30 ページ

あとがき 31 ページ

「ブコン少女をおとしたい！」



かいと



おかっぱ



りあ

悪魔に恋しちゃダメですか？



りり



ゆうと



さき



あき

墮天使ちゃんの休息講座



ゆの



だっし

インド姉弟の日本旅行



せんり



ひかり

第1話



僕と莉亜の出会い

「ここ、かぁ」

校門の前に立って言う。

今日は桜ヶ丘高等学校の入学式。

僕は三葉 海斗(みつば かいと)。入学式だ。

「かいとっ」

「うわ、おかっぺじゃん」

「うわってなんだよ。うわって」

後ろから飛びついてきたのはおかっぺ、こと、空木陸星(うつぎおかじょう)である。

「な、かいと、今でも思うけどどっちも受かって良かったよな」

おかっぺは少し怯えた顔で言った。

「……それはそうだな」

そう、僕は小学校からの幼馴染だ。

そして高校受験も2人で行って受けた。

2人とも受かったから良かったものの……、な。

「ええと……、僕は1年4組だ」

「え、俺3組！隣かぁ。残念っっちゃ残念だけど、ましなほうか」

張り出された紙を見て、教室に向かう。

「じゃ、」

「ん、またな！」

一旦おかつぺと別れて教室に入った。

入った順にくじを引いて、そのくじの指す席に座るらしい。

「ん、……15、」

廊下から3列目、前から3番目の位置だ。

そこに座ると右隣に机に向かって勉強する女の子がいた。

(こんな日まで勉強？すごいなあ)

単純に尊敬だった。

そのとき、彼女が消しゴムを落とした。

「あ、あの……」

拾いながら声をかける。

「これ、落しましたよ」

「ん、……あ、」

それが、僕と旭奈 莉亜(あさひな りあ)の出会いだった。

「……ありがとうございます。助かりました」

にこつと笑顔になった。

(あ、)

それを見た瞬間、庇護欲、というか、その笑顔を守りたいと思った。

このときは自覚なんてなかったが、もしかしたこのときから莉亜に恋していたのかもしれない。

その日は入学式をしておかつぺと帰った。

次の日……

「あ、おはようございます」

「おはようございます」

教室に着くと、昨日の彼女が隣で本を読んでいた。今回はあちらから挨拶してくれた。

「えー、では、クラスの人たちと打ち解けるために自己紹介をしていきましょう。

まず、私は桜木 美鈴(さくらぎ みすず)です。

好きなものは甘くておいしいもの、苦手なものは努力しない人です。

いつでも大歓迎なので話しかけてくださいね」

次は右前の人から1人ずつ自己紹介していった。

そして彼女の番になった。

「私は旭奈莉亜。好きなものはお兄ちゃん。嫌いなものはお兄ちゃんを傷付ける全てです」
彼女の名前を知ってしまった。

そして僕の番。

「僕は三葉海斗。好きなものは剣道、？で、苦手なものは人の努力を馬鹿にするやつです」
席に着くと同時に、右隣から視線を感じた。

(え、旭奈さん、？なんで、)

とりあえず最後まで先生が話し終わった、その直後、
「ねえ」

と声をかけられた。

「はい」

「君が三葉海斗くん!」

「え、そうですけど……。」

突然碎けた口調で話しかけてきたこともそうだが、朝や昨日とはテンションも違い、距離も前より近くで話しかけてきた。

「やった! すぐ会えた~!!」

「え?」

なぜだろう、旭奈さんに元々認知されていたらしい。

「三葉くんさ、この学校の志望理由に『剣道部が強いから』って書いてたんだよね?」

「あ、うん」

「やっぱり! 推薦じゃないのに剣道部希望な人、少ないからさ、」

「推薦苦手だったからさ、」

テンションが上がっている旭奈さんには申し訳ないが、はは、と自嘲する。

「私ね、剣道部の練習、去年からだったかな。よく見てるの!! だから剣道部の部員が増えるのは嬉しいし、お兄ちゃんの活躍がもつと見れるようになるからぜひ入ってほしいの! あ、なんで志望理由知ってるかって? お兄ちゃんがやってるから私も入るつもりだけど、生徒会役員の人は新入生の志望理由を見せてもらえるの! で、ちょっと見せてもらって、

で、どう? 入る?」

「え、ん~……、」

悩んだ、振りをした。

「もちろん、入るよ」

言い切った。

……一番入りたいと思っている理由が『僕が剣道をやりたい』ではなく、『彼女に見られたい』になったことは置いておいて。

「やったー!!じゃあこれあげる!!保護者さんの署名は明日以降で良いから今日も来てね!じゃあまた後でね!!」
そう言いながら入部届を押しつけてから教室を出ていった。
僕はその入部届を壊れものを扱うように慎重に鞆に仕舞った。



1話!

悪魔に
恋しちゃダメですか?

「ねえきみ、どうしたの？」

そう言って、迷子になってた幼い私に話しかけてくれた不思議な男の子。その子は私にハートの飾りのついた、ステッキのようなペンを渡してくれた。「これを使ったら、きつとお母さん見つかるよ」って言いながら。

私はあの日から、あなたのことを忘れたことはありません――。

「りりっ。どうしたの？またそのペン持って」

この子は私の親友の咲希。小学校から仲が良くて、いつも私の相談に乗ってくれる子。

今の「りり」っていうのは、私――星風りりのこと。

「えっと……うーん、おまじない？みたいな？」

あの日のことを思い出すと、つい、このペンを握っちゃうんだよね。あの子に会いたいって

思ってるわけだから、ある意味、本当におまじないみたいなものなのかな。

「そういえば、今日、転入生が来るらしいよ！」

「え、そうなの？初めて知った」

私が驚くと、咲希は自慢げに言った。

「えへへ。昨日、先生に教えてもらったんだ。クラス委員だから、明日いろいろ教えてあげてねーって。」

なるほど、だから知ってたのか。にしても転入生、どんな人かな。仲良くなれたらいいな。

「はい！みなさん静かに！今日から転入生が来ました。」

そう言った先生の隣に立っているのは、小柄めの男の子。

「初めまして、真野都 優斗って言います！よろしくお願いします！」

ニコツと笑いながら挨拶をする。：なんか、どこかで見たことがあるような：気のせいかな。

「それじゃあ真野都くんの席は、窓際の一番後ろね。近くの人たちがいろいろ教えてあげてください」

真野都くんの近くは、前の席が私、隣が咲希、斜めが私の幼馴染の暁人くんだ。

とりあえず、私たち三人で休み時間を使って、真野都くんにいろいろ説明することになった。

咲希は「転入生をあたしたちで独占できるなんて、なんかおトクな感じだよね♪」とか言ってた。咲希らしいな、と思う。暁人くんは、もう真野都くんと意気投合したみたい。さつきから最近よくCMでやってるゲームの話をしている。私も、一応自己紹介くらいはしたけど：正直、何を話せばいいかわからない。これから仲良くなれたらいいな。

昼休み。私たちは校内を歩きながら、真野都くんはどこにどの教室があるのか、とかを話している。

「で、ここが理科室ね。普段はあんま使わないんだけど、実験って言われたらここに行く感じ。」

テキパキと説明をしながら先頭を歩いているのは咲希。その後に真野都くん、暁人くん、私の順で歩いている。

「咲希！先生が呼んでたよ。職員室に来てくだって。」

クラスメイトがやってきて咲希に言った。

「じゃあ、あたしは先生のところ行ってくるね。あとは頼んだ！」

それだけ言うと、咲希は、職員室に向かって走って行ってしまった。

さっきまで説明をしてくれてた咲希がいなくなると、急に静かになった。少しして、真野都

くんが躊躇いがちに口を開く。

「えっと：あとは、図書室と美術室だっけ？」

「あ、うん！図書室はこっちにあって：。」

咲希の代わりに、私が先頭に立って説明する。うう、こういうの、苦手なんだよっつ。

「ここが図書室だよ」

ほら、こういうことしか言えない！私が何か言おうと必死に考えていると、暁人くんが言った。

「ここはたまに国語の授業で使うのと、昼休み、放課後は開放してるから。開いてる時に生徒手帳持っていけば借りれるよ」

「ありがとう暁人くん、ナイス説明！」

私が言うと、真野都くんが笑った。

「二人とも、仲がいいんだね！」

「あ、うん！幼稚園からずっと一緒に」

年少の時から仲が良かったらしいから、もう十二年くらいになるのかな。

「そうなんだ！幼稚園から、ってすごいね」

「まあ、他にも何人かいるけどな。例えば、青柳とかも小・中同じで、幼稚園も同じとこだったらしいし」

青柳っていうのは咲希のこと。そう、幼稚園の頃は同じクラスになったことがないから知らなかったんだけど、同じ幼稚園だったんだよね。同窓会に行ったら咲希がいて、そこで知ったんだ。あの時はびっくりしたなあ。

「あ、そうだ！僕も二人のこと、苗字じゃなくて名前で呼んでいい？」

「もちろん」

私と暁人くんの声がハモる。

「私も優斗くんって呼んでいい？」

「俺も、優斗って呼んでいいか？」

「もちろんだよ！えっと…りりちゃん、暁人くん！」

私たちが言っていると、咲希が戻ってきた。

「ただいま…って、なんかめっちゃ仲良くなってる！いいなく、あたしのことも名前呼びして！」

「えっと…咲希ちゃん？」

「そうそう！あたしも優斗って呼ぶね！」

咲希と優斗くんもお互い名前呼びになったところで、ちょうどチャイムがなった。

「次、移動だよ！」と咲希が言って、みんなで急いで教室に戻った。

プロローグ



窓を開けた部屋の中に、字を書く音が響く。外から聞こえる風の音と、ペンを走らせる音が心地よい。私はそう思いながら、ひたすら勉強している。

そう。何を隠そう私はガリ勉である。：いや、ガリ勉といえば聞こえがいいが、実際は、特に趣味がないため、常に勉強に逃げてる悲しい人間。

友達と遊んだことは幼い頃くらいしかないし、テレビもニュースくらいしか見なければ、ゲームもやってない。芸術系も授業の時にやるくらい。

別に趣味なんてなくても、勉強をしてれば問題ないし。今まで、そう思って過ごしてきた。

「——せん！すみません！」

そんな声が風の音に混じって聞こえてきた。気になって窓から外を見ると、空から人が落ちてきている。

「すみませええん！窓を…窓を、開けてくださいっ！」

その子はそう叫びながら落ちてくる。戸惑いつつもとりあえず窓を開けると、その子は窓から私の部屋に入ってきた。

「いたた：ごめんなさいっ、おケガはないですか：？」

「うん：で、あなたは誰なの？今、不法侵入してることになるわけだけど」

私がそう言うと、その子はハツとした様子で言った。

「た、確かに！お願いしますっ、通報はやめてください！ボク、一応墮天使でっ」

：墮天使。その子を改めて見ると、背中には黒い羽、頭には黒い輪っかがついている。

うん、夢だな。いつの間にか寝てたみたいだ。そう思って頬をつねったけど、痛い。

「わあ!?きゅ、急にどうしたんですか!？」

「：夢かな、と思って」

私が正直に答えると、その子——墮天使は言った。

「夢じゃないですっ、仮に夢だとしても頬をつねるのはやめてください！ほらあ、赤くなっちゃってますよ！」

「別にいいよ。血が出てるわけじゃないんだし。…で、なんで来たの？」

「あっ、そうです！ボク、かみさまからの命令で、あなたを休ませに来たんですっ！」

神様からの命令で、私を休ませに？へえ、神様って意外と暇なのかな。そして、堕天使って、なんか悪い天使みたいなイメージあったけど普通に良い天使なのか。

「へえ…そういえば、名乗ってなかったね。私は…」

「知ってます！優乃さんですよねっ？」

「…え、なんで知ってるの…？」

なんで知ってるんだ。普通に怖い。

「ご、ごめんなさい！ボクたち堕天使は、かみさまからの命令と一緒に、命令に関わる人間

リストをもらっててっ。そこに名前とか、写真とかが載ってるんですっ！」
神様ってそんなこともできるのか。まあ、神様だしな…。

「じゃあ、……。」

話かけようとして、言葉に詰まった。

「どうしたんですか？」

「名前…聞いてない」

私が呟くと、堕天使は困ったように言った。

「えっと…ボクたちは、規則で本名を教えられなくて…。だから、優乃さんの呼びたいように呼んでくださいっ」

私の、呼びたいように…。

「クロ、は？」

「クロ！由来を聞いてもいいですかっ？」

「羽が黒いから」

「単純！そしてなんか猫っぽくないですかっ!？」

えゝ。クロ、だめかあ…。

「なら墮天使ちゃんとか呼んどくよ」

「そのまんまですね…。まあいいですけど…」

なんなんだ。呼びたいようにって言うから呼びたいように呼ぼうとしてるのに。

「で、休ませるって、具体的にどうするの？まさか強制的になんかさせるとかではないよね？」

「もちろんですっ！墮天使も天使の一種、そんな手荒なことはしませんっ！これから、ボクがあなたに対していろんな休息法を教えますから、それを一緒にやっていくんですっ！名付

けて、『墮天使の休息講座』ですっ！」

「一緒に？」

私が聞き返すと、墮天使ちゃんは笑顔で答えた。

「はいっ！何事も、きつと一人より二人でやった方が楽しいです！それに、ボクがお手本を見せたり、休むコツを教えたりすることもできますからっ！」

こうして、墮天使ちゃんによる休息講座が始まった。

プロローグ



「なあ、弟よ。日本旅行しないか？」

ある日、俺——東堂千里は、ねーちゃん——東堂光里に言われた。

「うーん、外出るのあんま好きじゃないからな……といつかねーちゃん、日本旅行なんてする金あんの？」

「もちろん、本当に旅行するってなると時間もお金もないから、家にいながら旅行をしよう！」

家にいながら旅行？

「それってどういうこと？」

「よくぞ聞いてくれた……このアプリを使うんだ！」

そう言ってねーちゃんが見せてきたアプリは、俺もたまに使ってるマップアプリ。

「え、これ？ただのマップじゃん。こんなんで旅行とかできんの？」

「ふっふっふ。それが、できちゃうんだな〜？」

ねーちゃんはマップアプリを操作して、パノラマ画像を開いた。アプリ内にある、実際に歩いているかのような写真が表示される機能だ。

それを見て、俺にはピンときた。

「もしかして、この機能を使って、実際に歩いてるみたいにするってこと？」

「そういうこと！これなら日本一周も夢じゃないでしょ？」

確かに、面白そう。外に出なくてもいろんな場所のいろんな景色が見れるっていうのはいいな。

「ということで、今日から一県ずつ見てって、四十七都道府県制覇しよう！」

「四十七都道府県、全部？」

「もちろん！で、どこから行く？」

ねーちゃんはもう今からやる気満々だ。

「最初は知ってる場所がいいんじゃないの？」

例えば、俺らの住んでるあたりとか、前旅行で行った場所とか。

「なるほど：じゃあ、第一回は東京編にするか！」

「おおー東京！」

「それじゃ、私は準備をしてくるよ！千里もなんか東京に行くっぽい感じにしといて！」

それだけ言うと、ねーちゃんは自分の部屋に行ってしまった。

：東京に行くっぽい感じとは。残された俺は一生懸命に考えたが思いつかなかったのと、りあえず観光名所の書いてあるガイドブックを用意することにした。

予告「あの日夢見た海に」

次回読み切りで掲載予定です。虫、死ネタなどを含むので、苦手な方は読まないことを推奨します。次のページに1ページ分の試し読みが載っています。ぜひ考察に使ってください！

あげは



し3



3り



あの日夢見た海に

ぼくたちがまだ小さい幼虫だった頃、ぼく——あげはと、しろと、るりは、約束した。

「木の上から遠くに見た海を、いつか、ぼくたちが成虫になったら一緒に見よう」って。

ぼくは、「ぜーったい、一緒に、あの海を見に行こうね！ぼくたち三人の約束だよ！」って

言って、しろは、「わたし、最近太ってきちゃって…成虫になるまでに痩せなきゃ！あと、

運動不足みたいだから、遠くまで飛べるように、今のうちに体力つけなきゃだね！」って言

って、るりは、「じゃあ、おれは最初に成虫になって二人のこと待っててやるよ！安心して、

ゆっくり成虫になりな！」って言って。

そうやって、三人でゆびきりげんまんをしたりして、笑い合っ

て。ぼくたちは蛹になる直前まで、そんなことを言い続けていた。そして、深い眠りにつく。

三人で一緒に、あの海に行く日を夢見て。

あとがき

ここまで読んでくださりありがとうございました！

この部誌のタイトル「仙禽」は、「鶴」という意味です。「鶴は千年生きる」というように、この作品たちが皆さんに長く読んでもらえるよう、また、皆さんの心に長く残るようになると願いを込めてこのタイトルをつけました。

皆さんはどの作品が一番好きですか？近々、感想などを送れるようにしたいと考えています。また詳細が決まったらあとがきに載せるので、楽しみにしていてください！

第二号は10月27日（火）に公開予定です。第二号は、今回の予告にあった「あの日夢見た海に」、「ブラコン少女をおとしたい!」、「悪魔に恋しちゃダメですか?」、「春色コンダクト」を掲載予定です。お楽しみに！